

教員養成大学における音楽学生の歌唱指導に関する意識

教育実践講座 爲我井 壽 一

Music Teacher-Training Students' Perceptions of Teaching of Singing

TAMEGAI, Hisakazu

Abstract

One of the most important things that teachers should keep in mind when teaching singing in music education at school is to provide appropriate guidance to pupils/students according to their mental and physical development. To ensure that children gain meaningful learning from singing lessons, it is important for teachers to possess the qualities and abilities that allow them to enjoy singing together with children. The author believes that, in addition to learning knowledge and skills, students in music teacher training programs need to acquire the ability to observe children and respond to their problems in learning singing.

Key words : teacher training, music education, teaching of singing, sense of purpose

I はじめに

筆者は、これまで秋田県内の小学校において歌唱や合唱指導の出前授業を実施してきた。小学校から送られてきた児童の感想文の中には、「音楽嫌い」であった児童が発声法の改善によって歌が楽しくなり「音楽が好き」になったという事例があった。また、発声の学習後に歌の歌詞の内容・意味と音楽を結び付けて考えながら作曲家の音楽的意図や音楽の流れをイメージして歌うと子どもの想像力が刺激され「歌の勉強が楽しくなった」というような変化を読み取ることができた。

小川昌文(2011)は小学校における歌唱指導における注意点について次のように述べている。「歌を歌うことは何かを表現する意思や意欲がないと成立しない意図的な活動である。教師は歌唱指導の実践においては、曲についてなぜ歌うのかを児童に理由を説明して指導する必要がある、何よりも教師自身が歌う気持ちをもっていることが重要であり、目の前にいる児童と一緒に歌いたいという気持ちになり、それが児童に理解される指導法が重要なのである」。また、堀見ら(1974)は、「小学校教員の児童に音楽教育の中で最も重要な要求事項は、子どもの中に潜在する音楽性を引き出す指導と創造性を育てることであり、教員自身が高度な指導技術と十分な音楽的素養を身に付けておく必要がある」と述べている。

音楽をすることの中で「歌を歌う」という行為は、一人一人の声や持って生まれた資質が異なることから、「人前で歌う」と「他者を意識」することになり緊張感が生じる。また、変声期の児童は歌声が不安定な状態となる

ため、「声＝自分」という「意識」が強いと「他者からの評価」を気にして歌うことに対して「楽しめない」という結果が生じることが多い。あるいは、「声の出し方」そのものが指導されていない児童は、歌唱の際に喉を傷めることがあり「歌うとノドが痛い」となり、そして「歌嫌い＝音楽嫌い」になって精神的にネガティブな状態で音楽の授業を受けなければならない。よって教員は、児童の学習状況や身体的・精神的な発達段階を考慮した音楽指導法を行っていくことが重要なのである。

では、教員養成大学における学生が音楽科教育で身に付けておくべき基礎的な歌唱指導に関する知識や技能は、どのようなものであるべきであろうか。特に教員免許状更新講習の教員の歌唱指導に関する問題点の一つであった「発声法」の指導について、学生が学校現場で実践的な発声や歌唱指導ができる基礎的な知識や技能をどのように習得しておけばよいか検討をする必要があると考えた。

このようなことから筆者が本学の音楽教育研究室に所属する3年次学生を対象とした「教育実践ゼミナール 音楽分野」の授業実践の検証と学生のレポートから歌唱指導法における発声指導について学生の意識を分析し、考察することとした。

II 音楽科教育における音楽指導の方向性

2018年5月11日に、さいたま市浦和区の埼玉会館にて日本全国音楽部門大学部会第43回全国大会が開催された。筆者はその第2分科会「新学習指導要領、教育職

員免許法改正と教員養成プログラムについて」に参加した。そこでは3人の音楽教育研究者から新学習指導要領に関する提言がなされていた。

分科会では現在、日本の音楽科の教育改革においては「21世紀型能力」—「基礎力」「思考力」「実践力」の三層構造の資質・能力の育成を掲げていることが確認された。そして、小中学校の学習指導要領が改訂され（2017年）、教員の資質・能力の向上のため教育職員免許法も改正された（2016年）が、これからの音楽科教員養成はどうあるべきか、大学の音楽科教員養成カリキュラムの要点や方向性をめぐって議論がなされた。

新学習指導要領にあたり高須一（2015）は、音楽科教育の方向性として「音楽科教育によって培われた資質・能力が他教科等の学習に生かされるものであり、汎用性・転移性のあるものであることを示すことが音楽教員に求められている」と述べている。そして21世紀型教育における「芸術教科」では、児童・生徒の「創造性」の育成に貢献することが期待されているとしている。

しかし、筆者は教育現場で児童・生徒に接する教員が、自分の能力を向上させながら子ども一人ひとりにどのように接し、どのように教育を実践するかという基本の重要性に変わりはないと考えている。

III 教育実践ゼミナール「声楽分野」授業実践

1. 概要

平成30年度の本学部3年次音楽学生を履修対象として卒業研究課題である論文の作成に向けて、リサーチの基礎・基本を学ぶことや論文作成に要する基礎力（文献・資料の収集スキル、読譜力、理解力、考察力、および文章力）を身につけることを目的として3人の教員（為我井、吉澤、石原）で授業を行った。

筆者は、声楽学習のための専門分野に関するDVDを使用して、3回の講義を行うこととした。第1回目は

11月13日「声・喉に関する知識について」、第2回目は11月20日「身体・喉の成長と歌唱指導法について」、第3回目は11月27日「声楽における発声練習法の音楽授業への応用について」を実施した。授業ではDVDを鑑賞しながら歌唱指導法について解説を行い、学生が教員としてどのような指導を行うことが望ましいかについて対話を行いながら授業を進めた。

2. 授業実践と結果

授業では「声の知識」「子どもの成長段階における歌唱指導の在り方」「学校現場での歌唱指導に応用するための基礎的な声楽知識を身に付けること」の3つの歌唱学習に関する要素についてDVD鑑賞を行った。声楽に関する「知識」の習得と歌唱指導への応用としての「創造性」の養成を目的として実践した。

第1回は、声・喉に関する知識を深めることに重点を置き、第2回は、子どもの成長段階における変声や学童嘔声等への対応の仕方を理解すること、そして第3回は、専門的な声楽発声法をどのように学校現場の歌唱指導に応用すべきかについて自分なりの考え方を持つことに主眼をおいて授業を実践した。DVD視聴後、発声や声のコンディション調整に関して下記のようなポイントが話し合われた（表1）。

使用したDVDは次のとおりである。

第1回：「声の不思議～美しい声を作るために～」解説・監修：米山文明（医学博士 日本声楽発声学会理事長）

第2回：「声の発育～美しい声を育てるために～」解説・監修：米山文明（医学博士 日本声楽発声学会理事長）

第3回：「ベルカントレッスン《基礎練習編》」声楽指導：マルゲリータ・グリエルミ

また、歌唱指導に関する重要ポイントとして次の3点

表1 発声と声のコンディションに関するポイント

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・レントゲン撮影による歌唱時の横隔膜の動きに注意する ・発声では横隔膜を吸気時に素早く下げ、呼気時には横隔膜がすぐに上に上がらないように支えながらゆっくりとスムーズに上がっていくようにする。 ・喉を開けるということは喉頭蓋を十分に起こしておくことである。 ・母音「イ・エ・ア・オ・ウ」発音時の舌の位置に注意する ・カラオケで歌う場合、アルコールを飲んで歌うと翌日に声帯に影響がでる。 ・発声、歌唱練習は適度な量を行い、適切な休息を取りながら行うことが望ましい ・発声の方法は質的な問題が重要である ・呼吸法と発声法の接点が大切である ・発声器官のケア：歌唱後、建物から外に出る際は冷気に注意する ・喉の調子がよくない時は、夜喉を温めてから寝るようにする ・喉は大声や飲酒によって調子が悪くなるが、気候や心身の生理的な変化によっても影響を受けるので、声を出しあり歌ったりしたときに違和感を感じる場合は耳鼻咽喉科医師の診察を受けることが望ましい |
|--|

表2 発声法に関するDVD鑑賞後の学生の感想（自由記述：下線筆者）

事例	分野	感想
1	発声法	横隔膜が内側に入らないようにゴムのような伸びを感じる事が重要であると読み取った。日本人は <u>息が漏れやすく「H」の音がでてしまう</u> ことが見られるので注意したい。
2	歌唱法	「歌詞」については、国語の要素もあると認識している。これは <u>国語・音楽といった横断的な学習にも繋がると考えられる</u> 。ただ歌うのではなく歌詞の内容を理解したうえで歌うことは非常に重要であり、上達のポイントであると思う。表現の仕方についても息の使い方、強弱などの工夫できるところはたくさんある。
3	発声法	DVDではベルカント唱法の歌い方の指導が行われていた。この唱法では呼吸を自然に、また腹部から腰まで適度に膨らむ感覚が分かった。自分は高音域を口先だけで歌う傾向があるので、この歌唱法はその改善に役立つと考えられる。
4	発声法	次の3点に気を付けて歌うことが難しいと考えた。1. 息もれになりやすいので「H」が入らないようにする。2. 「ミ・エ・ア・オ」の母音を同じ音程で、できるだけ各母音を繋げながらレガートで歌う。3. 力まないで歌う
5	発声法	体の使い方やポジションの保ち方など、自分の課題であるところも多く学習できた。練習として取り入れることも容易ではないと分かっているが、 <u>自分のやり方に+aとして意識的に取り組んでいくことができた</u> らよいのではないかと考えている。
6	歌唱指導法	“誰かに歌い方を教える”というのは、とても難しくて容易にできることではないが、 <u>簡単な内容で同じ効果を得られるような練習法を自分の練習を通して導き出すことができた</u> ら本望だと思う。
7	発声法	日本人にあった発声練習やポジション探しが必要だと思った。これは声楽を専門とする人はもちろん、 <u>小学生のうちから意識する必要がある</u> と感じた。自分でもやってみようかなと思った発声があったが、自分に合ったものであるかは継続してやってみて判断したいと思う。
8	歌唱指導法	<u>自分に合う方法を見つけて取り入れることは本当に大切だ</u> と思う。また、その見つけた方法を継続することで少しづつ変化していくことができると思う。だが子どもたちは、このような点について気づきにくいのではないかとと思うので、 <u>どう教えていけばよいのか、しっかり考えながら指導したい</u> と思った。
9	発声法	息の吸い方や使い方、発音時の口の中の状態、そして表情など細かいポイントまで詳しく説明されており <u>自分でも試したい</u> ことを沢山学ぶことができた。しかし実際に自分ひとりで練習してみるとなかなかできるものではなく、 <u>もっと自分なりに深めたい</u> と思った。
10	歌唱指導法	小・中・高の教科書では思った以上に発声について記述がなかった。理由として、声は生ものであり、教科書通りに指導してもうまくいかず、 <u>指導者の耳と経験、その場に合わせた言葉かけが必要</u> だからではないかと考えた。しかし、現場の先生方の指導の力量によっては、 <u>子どもたちの学びにかなりの差が出てくる</u> のではないかと考えた。

が挙げられた。

- (1) 声・喉に関する知識を深めること
- (2) 子どもの成長段階における変声や学童嘔声等への対応の仕方を理解すること
- (3) 専門的な声楽発声法をどのように学校現場の歌唱指導に応用すべきかについて自分なりの考え方を持つこと

特に、(2)「子どもの成長段階における変声や学童嘔声等への対応の仕方を理解すること」は重要である。

小学校や中学校での歌唱指導において、子どもにとって「歌うことを楽しむ」という一面がないと「歌の学び」

が成立しにくいということがいえる。よって、この「歌を楽しむ」ことと「歌を学ぶ」ことの二つの面を児童や生徒の年齢や学習状況に応じてバランスよく指導できる教員が求められているのである。

3. 発声法に関するDVD鑑賞後の学生の歌唱指導への意識について

第3回授業では専門的な声楽の発声法を学校現場の歌唱学習にどのように転用して指導するかについて、DVDを鑑賞しながら学生と話し合った。そして授業後に感想を自由記述で書いてもらった(表2)。

4. 分析と考察

- 事例1：「横隔膜」の支えと「息」のコントロールの重要性について理解したことが分かる。
- 事例2：「国語・音楽といった横断的な学習」として、歌詞の意味や内容に着目して国語教育と音楽教育の教科を横断した授業展開について関心があることが分かる。
- 事例3：レッスンを受講している日本人ソプラノ学生が「ベルカント唱法」による指導を受けながら発声法が改善されていく様子を細かく観察できていたようだ。また、それを自分の声楽技術に応用しようという積極的な意識が見られる。
- 事例4：DVD鑑賞ではイタリア人ソプラノ歌手が日本人の女子学生に指導していた。レッスンでは特に日本人の歌唱に関する問題点について指導が行われていた。当該の学生は声楽を専攻していることから自身の問題点との共通性を感じているようであった。
- 事例5：「ベルカント唱法」による歌い方の効果を認識している。そして自分自身がこの歌唱法を会得することの困難さを理解している。そして「自分のやり方に+αとして意識的に取り組んでいくことができたらい」とポジティブに捉えようとしている。
- 事例6：声楽学習における自身の経験と本格的なベルカント唱法に関するレッスンの様子を視聴してか、当該の学生は他者に指導することの困難さを感じているようだ。だが、児童・生徒への指導法として「簡単な内容で同じ効果を得られるような練習法」を見つけ出したいというポジティブな意見も述べている。
- 事例7：発声法に関して「日本人にあった発声練習やポジション探しが必要だ」という学生の感想からは、イタリア人と日本人の声の出し方や共鳴に関する発声法の根本的な違いを感じていることが伺える。そして学校教育の歌唱授業で「発声法指導について小学生のうちから意識する必要がある」と感じたようである。
- 事例8：練習や学習の中で自分自身の感覚的な声の出し方や方法を見つけることがある。当該の学生は、その方法を一時的なものではなく繰り返して練習しないと身につかないことを理解している。このような発声や歌唱に関する継続した基本学習や練習の重要性を児童や生徒に「どう教えていけばいいのか、しっかり考えながら指導したい」と述べている。
- 事例9：「自分でも試したいことを沢山学ぶことができ

た」「練習してみるとなかなかできるものではなく、もっと自分なりに深めたい」からは、学生がDVD鑑賞を視聴後に実際に自身の発声練習に転用を試みたが、思ったようにはすぐに成果が出なかったことが読み取れる。しかし、「もっと自分なりに深めたい」という意見からは今後練習を継続しながら自分の身体に覚えこませたいという意識が感じられる。

- 事例10：授業では学生に小・中・高の音楽教科書（小・中は教育出版と教育芸術社、高校は教育芸術出版と音楽之友社）に記載されている「発声法」の部分について説明を行った。当該の学生は「小・中・高の教科書では思った以上に発声について記述がなかった。」と率直な感想を述べている。その理由として、「声は生ものであり、教科書通りに指導してもうまくいかず、指導者の耳と経験、その場に合わせた言葉かけが必要だからではないか」と述べている。そして教師は「教科書を教える」のではなく、「教科書を使って」音楽や歌の本質を子どもに伝えることの重要性を理解していることが分かる。よって「現場の先生方の指導の力量によっては、子どもたちの学びにかなりの差が出てくるのではないか」と思った。」と、教師の責任の重さについて指摘している。

IV まとめ

発声法と歌唱法に関する3回の講義を行い、最後に学生に「教員として学校現場でどのような歌唱指導を行うことが望ましいか」というテーマでアンケート調査を実施した。

発声法DVD鑑賞後の学生の感想からは、専門的な声楽学習を学校現場の歌唱指導にどのように応用すべきかについて、自分自身の学習体験をもとに意見を述べていることが分かった。また児童・生徒に分かりやすく指導するための「伝え方」の工夫や国語と音楽の教科横断的な授業の実施等、歌唱指導にどのように声楽学習を転用すべきかを述べている学生もいた。

今回の結果から、発声法と歌唱法に関する基本的な「知識」、声や歌唱に関する「観察力」があり、学校現場でそれらを活用する「技能」の「応用力」が育成できると判断できた。だが、小学校における音楽教育の目的の一つは、児童の「情操」や「感性」の育成に寄与することである。人間的な成長の発達のためには児童が音楽作品の持つ芸術的な「感動」を「体験する」必要がある。よって学生の今後の課題は、児童一人一人問題点に対して柔軟な指導を心掛けられるような「音楽的な観察力と

対応力」を身に付けることを意識した学習の在り方である。

参考文献

- 小川昌文 (2011) 「歌唱」の意義と留意点, 『最新 初等科音楽教育法 [改訂版] 小学校教員養成課程用』, 初等科音楽教育研究会編, 音楽之友社, p52
- 早川倫子・虫明眞砂子 (2012) 歌唱指導における教師力の育成について～免許状更新講習の実践を通して～, 岡山大学教師教育開発センター紀要 第2号 別冊, pp.60-70
- 堀味正夫・柏瀬愛子・佐地多美・野村美保子・藤田まゆみ (1974) 教員養成課程をもつ大学における音楽教育の一考察, 名古屋女子大学紀要 20, pp.151-163
- 福井一 (2008) 音楽と脳・こころ, 特別講演 (日本教育大学公開養護教諭部門全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会第43回研究協議会並びに総会開催要項) 全国国立大学附属学校養護教員研究会編
- 森下修次・菊地雅樹・高須一 (2015) 音楽科は存在できるのか—/ 学校教員, 行政, 研究者の立場から, 音楽教育実践ジャーナル Vol.13 no.1 pp.54-65
- 高須一 (2015) これからの学校教育が子どもに培うべき学力とは何か —21世紀型スキルを視点にした創造性の育成, 音楽教育実践ジャーナル Vol.13 no.1, pp.6-17
- 爲我井壽一 (2017) 小学校教員志望学生に必要とされる「音楽的能力」について～一般学生と音楽学生の音楽学習に関する比較から～, 秋田大学教育文化学部教師力高度化プロジェクト研究収録第3号 pp.25-42
- 日本教育大学協会全国音楽部門大学部会会報 (2018) 第2分科会 新学習指導要領, 教職員免許法改正と教員養成カリキュラムについて, 第43号 pp.18-21